

その7 コバンソウ

平成27年の春、鎌倉を訪れた際、茎の先に小さい虫がいくつもついたような不思議な植物を見かけました。写真を撮ったきりすっかり忘れていましたが、昨年夏に埼玉県外来種調査に参加した際、再び出会いました。調べてみると、それはヨーロッパ原産のコバンソウというイネ科の植物で、明治の頃に観賞用として導入され野生化したようです。茎の先の細い柄に小判のような形をした長さ1-2cmほどの可愛らしい穂が10個ほどつきます。穂は夏には光沢のある黄褐色になります。ときどき空き地などに群落を作りますが、黄金色の穂がユラユラしている様は結構美しいと感じます。外来生物という悪者扱いされがちですが、身の回りにはまるで在来種のように普通の存在となっているものも多いことにも気づかされました。



(嶋田京美)

その8 ナルトサワギク いよいよ埼玉に来る

特定外来生物(植物)として、埼玉県ではアレチウリ、オオフサモ、オオカワヂシャ、オオキンケイギク、ミズヒマワリが有名だが、ここにきて他県で騒がれている特定外来生物「ナルトサワギク」がついに埼玉県にもやってきた。とうとうきたかという感がある。2016年9月朝霞市在住の横尾柊子さんが新河岸川の河川敷(朝霞市)で発見した。キク科の植物で黄色い花を咲かせる(写真)。365日24時間営業で種子を飛ばし、アレロパシーもあり、なおかつ家畜に有害(食中毒)というから、今後の対応を踏み誤らないようにしなければならない。おそらく本県初の記録になるのではないと思われるが、すでに県内に出現済みの例があれば是非教えていただきたい。(なお、現地では2014年ごろにはすでにあったという話を地元の方からその後聞き込んだ。)



(牧野彰吾)

生きものフォーラム開催のお知らせ

第3回生きものフォーラムを開催します。

市民による生物調査の新たな可能性
～観察記録を市民科学へ～

日時 平成29年2月25日(土)
午後 1時30分～4時30分
会場 浦和コミュニティセンター第15集会室
プログラム

- 事例報告
・半世紀にわたる鳥類のラインセンサス活動
・県のレッドデータブック(動物編)の調査活動
・環境省モニタリングサイト1000里地調査
・高校生物部のネットワークによる調査活動
■ 講演
北村 亘 氏(東京都市大学講師・NPO法人リトルターンプロジェクト代表)
・「市民科学を活用したコアジサシ保全活動」
■ ポスター展示(県内環境保全団体の活動報告)
■ フロアディスカッション

会員のつぶやき

地球温暖化対策では、CO2等を削減する緩和策だけでなく、気候変動への適応策も必要になっています。農法の改良や強靱な国土づくり等を進めることは重要です。人間以外の生物にとってはどうでしょうか。何万年超という気候変動であれば、自然淘汰のなかで適応できたものが生き残りました。数百年というなかでは適応策という選択肢はなく、あるのは人為淘汰だけではないでしょうか。そして、生物多様性の喪失で困るのは人間なのです。昨年11月のパリ協定の発効を機に、人間社会をもう一度見つめ直す必要があると感じています。(星野弘志)

いろいろ生きもの通信 No.4

- 発行日 2017年1月1日
■ 発行 NPO法人
いろいろ生きものネット埼玉
■ 事務局 さいたま市大宮区大門
3-205ABCビル303
■ e-mail iinet.saitama@gmail.com

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

外来植物ポケットブックを発行しました!

一口に環境問題と言ってもその中身は様々です。日本では、戦後、高度経済成長とともに大気汚染や水質の汚濁、騒音など公害が顕在化し、主要な環境問題となりました。公害に対しては、規制や国や自治体の取組、企業の努力などにより今ではかなり改善されました。例えば、大気汚染の指標の一つに視程(大気の見通し)がありますが、武蔵野市の成蹊学園が行っている視程観測では、東京タワーが見えた日は、1965年には22日でしたが、年々日数は増え、2011年には131日に達しました。暮らしの中でも綺麗な青空が広がる日が増えたと感じている人も多いのではないのでしょうか。一方、なかなか解決が難しい環境問題もあります。一つは地球環境問題、すなわち温暖化です。温暖化は人が便利に暮らすのに必要なエネルギーを得るために引き起こされる問題で、近代的な暮らしと温暖化は表裏一体とも言えます。そのため、すぐに温室効果ガスの排出を規制すればよいというわけにはいきません。もう一つの困難な課題が生物多様性の危機だと思います。現在、地球上の生物多様性は人間活動により急速に失われていると考えられています。この急速な生物多様性の喪失をどう食いとどめるのかが大きな課題ですが、温暖化と同様、ハードルは高く時間の掛かる問題だと思います。生物多様性に関する課題の中でも特に厄介なのが外来生物問題です。日本に分布している植物の約3分の1は広い意味の外来植物だと言われていますし、多くの動物種も海外から移入し定着しています。既に日本の生態系の一部となっている種も数多くあります。そのため、元々日本にいなかったからと言って、全ての外来生物を日本から駆逐することは不可能です。現実的ではありません。しかし、かといって、本来アマゾンで生育しているはずのオオフサモの様な植物が日本で闊歩している姿を見ると違和感を感じます。では、どうすれば良いのか?正直、ベストと言えるような答えはありません。当面、最も重要なのは、これ以上無計画に外来生物が入らな

いよう水際で防ぐことだと思います。また、これはなかなか困難ですが、既に入ってしまった種についても、特に生態系や人間の健康、農業に被害を与える種に対しては、積極的な防除なども必要だと思います。いずれにしても、外来生物



の動向を注意深くウォッチすることが重要なのではないのでしょうか。

さて、ここで本題です。外来生物、特に外来植物をウォッチすることを支援するため、当団体では、昨年10月「埼玉県の野外植物観察に役立つ外来植物ポケットブック」を発行しました。外来種対策の考え方や、埼玉県内で対策に取り組んでいる団体の紹介、主要な外来植物に関するミニ図鑑などを掲載しているA5判30ページほどの小冊子です。PDF版は当団体のWEBサイトで公開しています。また、カラー印刷物も送料のみで頒布しています。興味を持たれた方は是非ご覧ください。(嶋田知英)

レイクタウンのエコウィークに出展しました

平成28年10月21日～23日の3日間、越谷市のイオンレイクタウンでエコをテーマにした参加型環境イベント「Act Green ECOWEEK 2016」が開催され、当会も前年に引き続き出展しました。

今回は「埼玉の生きもの」～生物多様性ってなんだらう～のコーナーに埼玉県内でよくみられる外来植物について展示をしました。平成26年度から当会が現地調査やアンケート調査をしてきた結果を外来植物の写真を中心にしたポスターにまとめ、併せて、当会が作成した「外来植物ポケットブック」を配布しました。

休日には多くの買い物客で込み合い、興味のある方が足を止めて展示を熱心に見ていらっしゃいました。立ち寄って担当者とお話をされた皆様からは「外来植物ってなに?」「近所でよく見かけ

る」「きれいなので自宅で栽培している」「外来植物だということ知らなかった」といった声が聞けました。また、外来植物ハンドブックも好評で400部あまりを配布しました。来場者の皆様が今回の展示を見ることで改めて外来植物について興味を持っていただき、生物多様性を考えるきっかけとなれば幸いです。(野澤裕子)



レイクタウンエコウィークにおける展示の様子

侵略的外来生物県民参加モニタリング調査体験談

平成28年6月15日、曇り、絶好の調査日和。4月にオオフサモの大群落を発見した本庄市で侵略的外来生物県民参加モニタリング(以下、「県モニ」という。)に挑戦しました。昔取った杵柄を信じ、無謀にもほぼノー勉で挑みましたが、一人では心細いため脇坂理事長と嶋田理事にご足労願いました。今回の調査は元小山川のオオフサモの状況把握も目的の一つであったため、元小山川沿いの土手を通って、国道17号線に合流し、市街地を戻るコースを選択しました。公園の駐車場に車を置き、土手から時計回りにスタート。ムラサキツメクサ、シロツメクサ、セイヨウタンポポ、ヘラオオバコなど定番植物をチェック。自分の花粉症の大敵であるネズミムギ、ホソムギも大量に生えていましたが、もう花の時期は過ぎていたのでマスクなしでも大丈夫。畑の近くには、オッタチカタバミ、シナダレスズメガヤ、セイタカアワダチソウ、ハキダメギクが目立ちます。川に降りると、ヨシ、コガマ、オランダガラシなどの間からオオフサモが見られます(図)が、4月の時に見られた大群落の数は減少していました。対岸には、ニワウルシ、ハリエンジュ、ヨウシュヤマゴボウを確認。国道17号線に沿った歩道では、コマツヨイグサ、メマツヨイグサ、マメアサガオ、さらに枯死したものの果実にたくさんの種を蓄えたナガミヒナゲシが見られました。今回は2.4kmのコースを2時間20分かけて踏査、33種類の対象植物を確認しました。三人いれば文殊の知恵で、多くの植物を同定できましたが、現場では判別できないものもありました。

平成28年10月16日、晴れのち曇り、絶好の県モ

ニ日和。今回は同じルートを一人で探索。前回の反省をふまえ、当団体で作成した



元小山川で他の植物と混生するオオフサモ(矢印)

「外来植物ポケットブック」と自分なりに作成した植物同定メモを持参して調査スタート。土手を見渡すとセイバンモロコシとコセンダングサの大群落で壁ができていました。しかもそれらが背丈より高いため、河川敷に降りられる場所が少なく、河川の様子は遠目にしか観察できないところが多かったのですが、オオフサモはヨシやミソバなど他の植物に押されて、水面の広がりが抑制されているようでした。前回に引き続き確認できた植物は20種類で、新たにコハコベ、オニノゲシ、アレチハナガサ、マルバルコウ、タカサゴユリ、ホシアサガオが見られました。今回は2時間30分で踏査、26種類の対象植物を確認しました。

今回の県モニではイネ科とキク科植物の同定に苦労しました。現場で判別できない植物は写真を撮ったり、現物を持ち帰って図鑑やインターネットでの確認が必要でした。今後は「外来植物ポケットブック」などを活用して、できるだけ現場で同定できるようにしたいと思います。

(茂木守)

夏の見学会 木場公園の帰化植物見本園 2016年7月24日

平成28年の夏の見学会は、木場にある帰化植物見本園に行きました。参加者は8名でした。

ここでは普通の公園では目の敵にされる外来種を大事にして、生えてくる在来種を取り除くというやや変わった作業をしています。思ったほど広い場所ではありませんでしたが、柵内には聞いたことがないような植物が所狭しと植えられていました。暑い日でしたが、ボランティアの方が手作業で丁寧に引き抜き作業をしていました。

それぞれの帰化植物には、写真のように種名・原産地が書かれた札がかけられています。屋外では判別が難しいククイモとイヌククイモが並んで植えられていて、違いをまとめたものを見せていただきました。

	ククイモ	イヌククイモ
開花時期	9～10月	7～8月
葉身の形	イヌククイモの方が狭い	
葉身の毛	ククイモの方がざらつく	
葉柄	ククイモには狭い翼がある	



また、最近発行した帰化植物ガイドブックが置かれており、1冊ずつもらうことができました。一味変わった植物園です。目新しく珍しいものがありますので、一見の価値ありでしょうか。(小峯昇)



シイタケが出てきた!

良質なタンパクや各種ビタミン・ミネラルを多く含み、古くから不老長寿の食品としても珍重されてきたシイタケ。平成27年の3月、濃厚な風味のシイタケが食卓に並ぶことを夢見て、私たちは、重労働ゆえ担い手が減っている「シイタケ原木栽培」にチャレンジしました。

今回、栽培過程を振り返りつつ、種菌の接種から収穫した時の飲みまでをご報告します。

さて、シイタケ栽培は、原木となる木を秋以降に伐採し、ソメイヨシノの開花日前までにシイタケ菌を接種することから始まります。私たちは昨年の3月に駒打ち・仮伏せを行った後、5月にシイタケ菌を接種した原木(=ほだ木)をほだ場へ移動しました。今回使用した種駒は、自然条件下での自家用栽培に適した品種なので、ほだ木を組んだ後は、ほだ場の管理のみ行うこととなります。収穫までの間も、2か月に1度の森林整備活動の時に、アズマネザサが繁茂して風通しが悪くならないよう、ほだ木周りの刈り払いなどを行いました。

二夏が過ぎた昨年9月にほだ場へ行ったところ、残念ながらほだ木の状況に全く変化はありませんでした。5月に1本だけほだ木を切断した時、シイタケ菌が蔓延しているのを確認したので、絶対にシイタケは発生する、と信じてはいた

ものの、不安を払しょくできないまま時間が過ぎていきました。

そして、日平均気温が10℃前後となった11月。活動日に参加者全員でほだ場に行ってみたところ、見事にシイタケが発生していました。「緑の森」が「キノコの森」になったのです。参加者はあまり期待していなかったため、逆に喜びも大きかったです。初めての収穫では、優に5kgを超えました(推定)。

今後2年くらいの間は春・秋に発生します。活動に対するモチベーションが上がり、里山保全が加速すればといいな、と期待しております。

(牧野敏之)

